

マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景2 —中世の隠修士—

狩野智洋

1. 序

グルントマンは11世紀半ばから世紀末にかけて異端に関する記録が皆無である点を指摘し、その理由として、クリュニー大修道院から始まった修道院改革とグレゴリウス7世（Gregorius VII, 1020頃-85, 在位1073-85）による教階制改革、カンタベリーのアンセルムス以来の神学的考察の隆盛が、11世紀前半の異端派を生み出したエネルギーの受け皿になったからだとしている。¹しかし、クリュニーに発する修道院改革がそのような受け皿とはなり得ない内容であったことは前稿で考察した通りである。²クリュニーの修道院改革が何らかの影響を及ぼし得たとするならば、それは寧ろ、教会改革を目指したグレゴリウス7世に、世俗権力からの教会の自由（*Libertas ecclesiae*）という基本理念を示し得たことにあったと思われる³。ベネディクトゥス会則から逸脱したクリュニー大修道院等の実態を批判し、本来の精神に回帰しようとしたモレームのロベール（Robert de Molesme, 1028頃-1111）によって1098年に新たに設立されたシトー会が急速に発展を遂げたことを考えると⁴、クリュニー大修

1 Vgl. Grundmann, Herbert: *Religiöse Bewegungen im Mittelalter*. 4., unveränderte Auflage. Reprografischer Nachdruck der 1. Auflage, Berlin 1935. (=Historische Studien, Heft 267) Mit einem Vorwort zum Neudruck 1960 und dem vom Verfasser auf dem Zehnten Internationalen Kongreß der Geschichtswissenschaften, Rom 1955, erstatteten und ergänzten Forschungsbericht „Neue Beiträge zur Geschichte der religiösen Bewegungen im Mittelalter“, Darmstadt, 1977. S.483

2 拙論「マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景1 —私有教会制、修道院改革と11世紀に於ける異端の発生—」（『言語 文化 社会』第13号 学習院大学外国語教育研究センター 2015年3月 S.1-18）を参照のこと。

3 Vgl. Frank, Karl Suso : Cluny, In: *Theologische Realenzyklopädie*. Studienausgabe. 8. S.126-132. Hier S. 130f.

その一方で、モリスは歴代教皇らによって特許状を通じてクリュニー大修道院に与えられた保護がクリュニーの発展に大きく作用したことを示唆している。Vgl. Morris, Colin: *The Papal Monarchy. The western church from 1050 to 1250*. Oxford, 1989, reprinted 2001. S. 64.

道院等の修道院改革が異端発生を阻む一因になったとは考えにくい。ロベールはシトー以前の1075年にベネディクトゥス会則に忠実に従うことを目的としてモレームに大修道院を建設するも、その後、封建制を基盤とする時代の例に漏れず、この修道院が当初の目的に反し一大修道院網の頂点となり、大きな影響力を持つに至ったため、教会の許可を得た上で21名の改革を志す修道僧とともにモレームを去り、シトーに移ったのである。この点から考えても、「真の意味での宗教的な修道会 (religiöser Orden im eigtl. Sinne)」⁵を作り、維持することがいかに困難なことであったかが窺われる。シトー会については、中世の女性による宗教運動とも密接に関わる問題なので、また稿を改めて論じることとする。いずれにしても現在では、クリュニーの修道院改革の影響に至る所に見ようとしたかつての歴史研究⁶と異なり、その影響は極めて限定的であるという見解が一般的である。

クリュニーの修道院改革よりも寧ろ見逃してならないのは、隠修士 (eremita) の存在である。上述のロベールも修道院を出て、隠修士となっている。そこで本稿では、隠修士が登場した状況を考察し、その存在がクリュニー修道院改革よりも大きな影響を中世の宗教運動に与えた事を明確にした

い。

現在知られている最初の隠修士は3世紀後半にエジプトで活動した、修道者の祖と呼ばれる独住修道士のアントーニオス (Antonios »Aigyptos«, 251頃-356) であるが、同じ頃のパコーミオス (Pachomios、292頃-347) が労働を重視した共住修道院を建てたのがその後の修道制の主流となった。⁷つまり、これが後の修道院につながっていったのである。隠修士が独身、清貧、断食によ

4 ロベールとシトー会の設立については以下の文献を参照した。Altermatt, Alberich Martin : Zisterzienser/ Zisterzienserinnen. In: Theologische Realenzyklopädie. Studienausgabe. 36. Berlin, New York, 1993, S. 704-715. Elm, Kaspar: Zisterzienser, -innen, A. Allgemein. In: Lexikon des Mittelalters. Taschenbuchausgabe. 9. München, 2003. Sp. 632-635. Richard, Jean: Robert, 59. R. v. Molesme. In: Lexikon des Mittelalters 7. Sp.909f. Gleba, Gudrun: Klosterleben im Mittelalter. Darmstadt, 2004, S.130-142. Buttinger, Sabine: Hinter Klostermauern. Darmstadt, 2007. S. 56ff.

5 Elm, Kaspar: Zisterzienser, -innen, A. Allgemein. Sp. 632

6 Vgl. Morris, Colin: The Papal Monarchy. S. 66

7 アントーニオスとパコーミオスに関しては以下の文献を参照した。Gleba, Gudrun: Klosterleben im Mittelalter. S. 23-26.

って自己の欲望と戦っていたように、後の修道士達も清貧、貞潔、従順の誓願を立てていたが、もはやそれが十分に実行されなくなっていたことは前稿で見たとおりである。こうした中で、いわば原点に立ち返ろうとした動きが、11世紀の宗教的側面で最も顕著な特徴の一つである、隠修生活に対する情熱の高揚である。⁸ この時期隠修士は他の地域にも存在していたが、人々の意識を変えるほどの影響力を持ったのは、11世紀と12世紀のイタリアにおいてであった。彼らの大多数は独居者ではなく、数人の仲間や時には弟子の集団とともに荒野に隠遁していた。また、隠遁する代わりに世間に出て説教や司牧活動を行うこともあった。彼らは既存の修道院生活の伝統的な形態に召命を見いだせない者達であり、修道院外に新しい共同体を設立するために隠遁した者達であった。

2. 中世の先駆的隠修士 —ニールスとロムアルドゥス—

隠修生活に対する熱意が発揚し出したのは10世紀から11世紀にかけてのイタリアに於いてであった。当時まだギリシア語が話されていたカラブリアのロッサーノ出身で、ギリシア式の禁欲と隠遁生活の修行を積んだ、イタリア最初の偉大な隠修士の一人であるニールス（Nilus, 910頃-1004）⁹の周囲に弟子達が集まり、より厳しい禁欲と労働の生活に励んだのが現在のところ始まりと考えられている。ニールスは940年にギリシア正教修道院に受け入れられ、メルクリオン修道士主教区に所属した。943年からおよそ3年間、修道院近くにあったミカエル洞窟に住んだものの、イスラム教徒から逃れるために弟子達と共にロッサーノ近郊の彼の所有地の一つに移り住んだ。そこで彼は聖ハドリアンとナターリアに捧げられた礼拝堂でおよそ25年に渡って贖罪生活を送り、多くの奇跡を起こしたと伝えられている。しかし彼はロッサーノ主教の職は拒ん

8 本稿で扱う中世の隠修士については主として以下の文献を参照した。Morris, Colin: The Papal Monarchy, S. 68-74
Goez, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. 2., aktualisierte Auflage. Bearbeitet von Elke Goez. Stuttgart, 2008, 48-56 Grundmann, Herbert: Religiöse Bewegungen im Mittelalter, S. 488-493

9 ニールスに関しては次の文献も参照した。Dell'Omo, Mariano-Antimo: Neilos I.N. In: Lexikon des Mittelalters 6. Sp. 1085

でいる。イスラム教徒の襲撃によりカラブリアを去り、979年頃から994年までヴァッレルーチェ修道院に滞在した。その後ニールスはガエタ近郊のセルベーリに居住したが、1004年ガエタ公らがニールスの記念碑を建てようとした時にそこから立ち去った。彼はローマ近郊のグロッタフェッラータに聖マリア教会と修道院を設立するため、トスカーナ伯グレゴリウス1世に援助を願い出るための道中、ギリシア正教の聖アガタ修道院でこの世を去った。ニールスは皇帝と教皇を含む権力者達にも臆することなく苦言を呈したという。

ニールスよりも大きな影響を与えたのがロムアルドゥス (Romualdus, 10世紀中頃-1023~27)¹⁰である。973年父ラヴェンナ公セルギウスと共に私闘に巻き込まれたロムアルドゥスは、父が親戚を打ち殺すのを目の当たりにし、父の代わりに贖罪をするためにラヴェンナ近郊のサンタポリナーレ・イン・クラッセ修道院に入った。しかし、仲間の修道士らの道徳的怠惰に不満を抱いて修道院を去り、当時ヴェネチアの潟に住み、厳しい修行で知られていた隠修士マリヌスに師事し、彼の下で5年の間修行したが、その自己流の修行に満足できず、機会を得て、師のマリヌスと共にピレネー山脈の北の緩斜面に位置するサンミッシェル・ド・キュクサ修道院に移った。ロムアルドゥスはここの図書館で読んだ『教父伝 (Vitae Patris)』と約10年に渡ってエジプトの隠修士の生活方法と教えを調査したカッシアヌス (Johannes Cassianus, 360頃-433)¹¹の『講話集 (Collationes)』に、厳格な修行という、自らの理想により近い生活への道筋を見いだした。その後イタリアに戻り、ラヴェンナ周辺の湿地やロマーニャ、ウンブリア、マルケのアペニン山脈の人気の無い場所で隠修生活を送った。コマッキオの南にあるペレオ島 (現在の聖アルベルト島) に滞在していた時、皇帝オットー3世 (Otto III, 980-1002、ドイツ王在位 983-1002、神聖ローマ皇帝在位 996-1002) がサンタポリナーレ・イン・クラッセ修道院の改革の為に彼を修道院長にしたが、修道士達に失望したロムアルドゥスは再びそこを去った。彼はローマの近くで隠修士の団を指導し、その中にはオット

10 ロムアルドゥスに関しては次の文献も参照した。Tabacco, Giovanni: Romuald, 2. R. v. Camaldoli. In: Lexikon des Mittelalters 7. Sp. 1019f.

11 カッシアヌスに関しては以下の文献を参照した。Chadwick, Owen: Cassianus, Johannes. In: Theologische Realenzyklopädie. 7. S. 650-657. Frank, Karl Suso: Cassian(us), Johannes. In: Lexikon des Mittelalters 2. Sp. 1550f.

ー3世と親しい者も数人いた。1001年の初めに隠修士達と共にペレオ島に戻ったロムアルドゥスはそこで多くの贖罪者を惹き付けた。それらの中から彼は隠修士の生活を送るに十分な能力を備えた者達を選び出し、修道院などで共同生活をする共住修道者（coenobita）に適した者達から分けた。ペレオ島にはオットー3世の近しい友人であった聖アダルベルト（Adalbert Vojtech, 956頃-997）に奉献された共住修道院（coenobium）が設立された。数年間イストリア半島で隠修生活を送った後、アペニン山脈に戻ると、多くの弟子が集まり、ロムアルドゥスは彼らの為に隠修士達の庵と小規模な修道院を作った。1021年に皇帝ハインリヒ2世（Heinrich II, 973-1024、ドイツ王在位1002-24、神聖ローマ皇帝在位1014-24）はロムアルドゥスをモンテ・アミアータの修道院長に任命した。ロムアルドゥスは引き続いてカマルドリに小さな庵を結び、また、マルケのヴァル・デ・カストロの修道院の庵室に籠もり、そこで息を引き取ったが、没年は1023年から1027年の間と推測されている。

彼の人生は時代の暴力と聖職者の腐敗に対する論争と、あまりに多くのベネディクト会修道士達の中途半端さに対する苛立ちで満ちていた。またロムアルドゥスは、隠修生活を送るためには、隠修士は先ず共住修道院の修道院長の配下で修道士達と共同生活をしなければならない、という西欧で支配的であった伝統を破った。即ち彼は、厳しい霊的生活を目指して努力する勇氣を持った者達を迂回させずに直接隠修生活に受け入れたのだった。ロムアルドゥスはまた、あらゆる騒々しい慌ただしさから隠修士達を守るために、特殊な修道院制度を作った。人里離れた場所に作られ、1人の修道院長によって率いられる隠修士達の居住地には付属する修道院があり、隠修士達がそれぞれの庵の中で誰にも邪魔されずに自己の救済と代理の贖罪と絶えざる神の賛美を行うことができるように、修道士達が隠修士達の為に生活必需品を調達する。更に、家政の面倒を見ることで彼らを世俗の義務から解放するため、典礼義務のより少ない助修士（conversus）の団が動員される。ロムアルドゥスによって導入されたこの等級付けされた役割分担の制度は後に、ヴァロムブローザ会やシトー会といった一定のベネディクト修道会によって採用された。一方でロムアルドゥスはヨーロッパ各地の著名人や身分の高い者達と常に親交があり、そのため彼

の死後も聖俗両界の指導層に影響を与え続けた。教会改革でも活躍した、11世紀で最も傑出した隠修士の指導者¹² ペトルス・ダミアニー (Petrus Damiani, 1006/1007-72) もその一人であり、彼はロムアルドゥスとは直接の面識はなかったようだが¹³、その伝記を書くことによって、ロムアルドゥスが始めた生活法の普及に大きな役割を果たした。正にこうしたつながりを通じて、ロムアルドゥスは11世紀におけるヨーロッパの教会改革の精神的土台を作ったと言える。

3. 教会改革に尽力した隠修士 ―ペトルス・ダミアニー―

ペトルス・ダミアニー¹⁴ は1006年若しくは1007年にロムアルドゥスと同じくラヴェンナで生まれた。両親の死後、彼は聖職者となっていた兄ダミアヌスの援助によってラヴェンナ、ファエンツァ、パルマで学問を修め、その後ラヴェンナで修辞学を教えたが、これによって彼は修辞学教師としての名声を得た。ダミアニーはマルケにある隠修道院フォンテ・アヴェッラーナの2人の隠修士と話をすることがきっかけとなり、1035年頃にこの隠修道院に入った。フォンテ・アヴェッラーナは1000年頃に設立され、ロムアルドゥスによって推進されたラヴェンナでの改革の重要な刺激を受けて隠修生活の形態を発達させていたが、当時は貧しい、どちらかと言えば無名の隠修道院であった。約20人の隠修士と約15人の助修士と使用人が居住していた。ダミアニーは通常必要とされる1年の見習い期間を免除された。また、時期は定かではないが、司祭にも叙階されている。

1040年と41年にダミアニーはおおよそ2年間、院長の求めに応じてボンボーザ修道院に滞在して修道士らに教授し、1042年にはペトラ・ペトルーサ近郊の聖ヴィンツェンツォ修道院に滞在して修道院改革の手助けをした。ここで彼はまた、ロムアルドゥス伝の執筆を開始した。フォンテ・アヴェッラーナに

12 Vgl. Morris, Colin: The Papal Monarchy. S. 70

13 Vgl. Goetz, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. S. 51

14 ペトルス・ダミアニーに関しては以下の文献も参照した。Reindel, Kurt: Petrus Damiani. In: Theologische Realenzyklopädie. 26. S.294ff. Fornasari, Giuseppe: Petrus, 32. P. Damiani. In: Lexikon des Mittelalters 6. Sp. 1970ff.

戻った後、1043 年から隠修道院の管理を引き受けた。

フォンテ・アヴェッラーナではダミアニーは隠修生活の理想である禁欲を、厳密な意味での会則によってではなく、厳しい禁欲と長時間の祈りを中心に据えた生活規則を編成することによって、より堅固に定着させようと努めた。この「会則（Regel）」が初めて書き記されたのは 1045 年から 50 年の間であり、その後 1057 年の版で一部修正された。1 棟の共同の建物内で、大抵は独居室に 2 人一組で生活している隠修士達は、日曜と祭日にのみ全員で祈禱を行うために集合する。彼らは極めて質素な衣服で満足し、裸足で歩かなければならなかった。断食の規定は非常に厳しく、週に 4 日はパンと水と塩の摂取のみが許されていた。とはいえ、ワインの全面的な禁止は貫徹されなかった。長時間に及ぶ詩編の朗唱があり、それはしばしば、腕を伸ばし、跪拝して自らを打ち打つ行為と共に行われた。何れにしても隠修生活は、通常の修道生活のより発展した生活形態、と見なされていた。

ダミアニーは彼の規則を作る際は第一にベネディクトゥス会則を参考にしたが、理想的な隠修に関しては可成りの点で一段と厳しい内容にした。また、大修道院長の地位もベネディクトゥスほど際立たせてはいない。フォンテ・アヴェッラーナの周囲には、既に存在していたり、新たに設立された修道院や隠修道院からなる小規模な連合体が形成されたが、それは会則や規定によってと言うよりも、ダミアニー個人の人格によって団結していた。尤も、この緩く結びついた隠修道院会は 16 世紀後半まで存続した。

ダミアニーはまた数多くの伝記作品、説教、詩、論文を著し、また、特に様々なテーマに関して述べた 180 通の手紙を残している。それらの手紙の中で彼は当時の殆ど全ての重要な問題に対して自分の立場を明らかにしており、また、神学、政治、法律の問題に関する論文を含む相当数の手紙は常識を越えた長さであった。そうした文章の中で彼は修道院の長所や隠修生活の賛美、自ら選んだ清貧、聖母マリアの敬虔とキリスト論、多くの神学的問題について書いているが、特に聖職売買という教会の悪弊に対しては容赦ない批判を浴びせている。

厳しい隠修生活を求める完璧主義と聖職者の不正を許すことのできない潔癖

さは正に表裏一体であり、これが「独特で思弁的な思想家でありながらも、全ての哲学は神学の僕に過ぎない、という命題を作った者、やむを得ず再三にわたり多くの人々の中で生きる隠修士、ローマ教会のために次々と論争を戦い抜かねばならない融和神学者、教皇と皇帝の関係が危機的に先鋭化し始めるのを共に見ていなくてはならない、双方の全世界的権力の伝統的協働の代表的人物」¹⁵ という相矛盾する面をダミアーンに与えたのだと考えられる。

ダミアーンは聖職売買を撲滅しようとする戦いに於いてローマ教皇庁の改革派とドイツの神聖ローマ皇帝側と接触した。改革は教皇と皇帝の協働によってのみ達成可能であると確信していたためであろう。ドイツの宮廷とのつながりはハインリヒ3世（Heinrich III、1017-56、ドイツ王在位1028-56、神聖ローマ皇帝在位1039-56）の死後も、特に皇太后アグネスを介して続いた。グレゴリウス6世（Gregorius VI、-1047、在位1045-46）とクレメンス2世（在位1046-47）の代にダミアーンは既にローマと接触していたが、関係が深まったのは漸くレオ9世（Leo IX、1002-54、在位1049-54）の時である。1057又は58年にステファヌス9世（Stephanus IX、在位1057-58）によってオスティアの司教枢機卿に任命された。それ以後もダミアーンは観想的な隠修生活を好む性質に反して、再三にわたりローマのために教皇特使を引き受けた。その中には急を要する重要な問題も少なからずあり、フォンテ・アヴェッラーナの孤独から離れ、遙か遠地まで出向かなければならなかった。幾度も教皇庁の任務から解放されることを願い出たが、彼の代わりが務まる人物はいないという理由で許可されなかった。1072年2月ペトルス・ダミアーンはラヴェンナ大司教と教皇庁との争いを仲介する任務で派遣されたラヴェンナからの帰路ファエンツァで息を引き取った。同僚の枢機卿であったヒルデブランド（Hildebrand、1020頃-85）がグレゴリウス7世（Gregorius VII、在位1073-

15 Goetz, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. S. 52

„ein origineller, spekulativer Denker, welcher dennoch den Satz prägte, daß alle Philosophie nur Dienerin der Theologie sei; ein Einsiedler, der immer wieder zwischen vielen Menschen lebt, weil es so von ihm gefordert wird; ein Ireniker, der für Rom einen Streit nach dem andern auszufechten hat; ein Vertreter des traditionellen Zusammenwirkens der beiden Universalgewalten, der mitansehen muß, wie sich das Verhältnis zwischen Papsttum und Kaisertum krisenhaft zuspitzen beginnt.“

85) として教皇位に就くおよそ1年前のことであった。

教会改革に於ける彼の功績は無視することのできないものであり、彼の著作は叙任権闘争の論難書に於いても引用され、教会法学にも受け継がれている。またダミアニーの隠修および修道の分野にもたらした影響も大きなものであった。更にダミアニーは初期イタリア人文主義の中でも知られており、ダンテ（Dante Alighieri, 1265–1321）は彼の『神曲（La Divina Commedia）』（1307–21）の「天国編（Paradiso）」の第21歌をダミアニーに当てている。

4. 民衆による宗教運動の発生 —ヨハネス・グアルベルトウス—

ペトルス・ダミアニーと同世代のヨハネス・グアルベルトウス（Johannes Gualbertus, 11世紀初頭–1073）¹⁶ はやはり聖職売買に対する批判から修道院改革を推進した人物である。彼はフィレンツェで生まれ、1030年頃にフィレンツェのベネディクト会の聖ミニアート大修道院に入ったが、1035年大修道院長が金銭によってその地位を手に入れたことが分かった時、ある隠修士の助言に従って即座に修道院を去った。修道院内での抗議が役に立たないため、市の中央広場の真ん中で、修道院という神聖な場所での聖職売買という不道德な行為を力尽くで止めさせるよう呼びかけたのだが、それが民衆の大乱闘に発展したため、グアルベルトウスは逃げ出さざるを得なくなったのである。短期間ロムアルドウスに由来するカマルドリに滞在した後、彼は数人の仲間と共にアクアヴェッラ（後にヴァロムブローザに改称）の人里離れた場所に引き籠もった。ここにグアルベルトウスは聖エッレーロ女子修道院長イッタによって贈られた土地に小規模な隠修道院を建てた。当初は隠修制を採っていたが後にベネディクトウス会則を全面的に採用することとなる。

グアルベルトウスはその妥協のない厳格さと規則に対する忠実さによって多くの人々を惹き付けた。間もなく若干の貴族が、ヴァロムブローザの隠修士達の代禱に大きな効果を期待して、彼に修道院を譲渡し、フィレンツェの周囲に

¹⁶ グアルベルトウスについては以下の文献も参照した。Spinelli, Giovanni: Johannes, 118. J. Gualbertus. In: Lexikon des Mittelalters 5. Sp. 580

は花輪状に隠修道院の連合体が生まれた。いくつかの点に於いてヴァロムブローザの共同体はシトー会による改革を先取りしており、それによって教皇および教会改革に尽力していた者達の注目を集めた。

1061年に聖職売買によってフィレンツェの司教となったベトルス・メツァバルバに対し、1067年グアルベルトゥスは民衆を扇動する目的で隠修士らを町に送り出し、且つローマにも派遣して告発させたが、結局メツァバルバの罷免には至らなかった。

また彼はパタリーア¹⁷を支援するためにミラノに隠修士や説教師を送り込んだ。パタリーアとは11世紀半ばにミラノで起こった、主として平信徒による宗教運動であり、聖職売買で職に就いた司祭と妻帯する司祭によって行われる礼典の拒否と、聖職売買と聖職者の妻帯に反対する説教と民衆集会という手段で抵抗した。そもその発端は、下級貴族出身で、助祭であったアリアルドゥス (Arialduş, 1010頃-66) が当初は在俗聖職者の妻帯に対し、その後ローマの改革思想の影響を受け聖職売買に対しても批判的な説教を行うようになり、また教養があり雄弁術に長けたランドゥルフス (Landulfus »Patarinus«, -1062頃) がそれに加わって、広い共感を呼んだ。パタリーアの構成員の出身は全階層に及ぶが、非貴族階級出身の下層民が大勢を占めていた。彼らにとっては聖職者を規律に従わせるということはまた、聖職者の出身母体である貴族階級の優越に対する戦いともなった。そのため、この対立は社会的な要素も持つようになり、宗教的規律の観念を徹底させるために初期の自治都市の組織を利用すること及び大司教という都市の支配者の権威を攻撃することによって、自治都市の早期の形成を促した。1056年末からパタリーアとその反対勢力の対立は激しくなっていたが、1057年5月10日ミラノ市民の支援を得て、聖職者に妻と離婚し貞潔な生活を送ることを義務づけ、それに反する場合は、司祭職と教会財産及び自己財産を失うことを規定した「下僕の貞潔について (de castitate servanda)」という、予め用意してあった教令に聖職者を強いて署名させたことで対立は更に激化し、その後ローマ教皇庁も仲裁に乗り出さざるを

17 パタリーアに関しては以下の文献も参照した。Keller, Hagen/Zumhagen, Olaf: Pataria. In: Theologische Realenzyklopädie. 26. S.83ff. Golinelli, Paolo: Pataria. In: Lexikon des Mittelalters 6. Sp. 1776f.

得ないほど激しさを増して行く。パタリーアと同様の運動はフィレンツェとミラノ以外にピアチェンツァやクレモナにも見られた。

1035年にグアルベルトゥスが最初にフィレンツェの中央広場で直接民衆に訴えかけたことが、当時の社会的情勢と相まって、その後のパタリーア等の民衆による宗教運動の一つの発火点になったと考えることができよう。グアルベルトゥスが教会改革に民衆を動員し得たという意味は大きい。それ迄は改革と言っても修道院内、教会内での動きであり、勢力関係によっては容易に封じられてしまったが、これ以後は教会・修道院も謂わば外部の目を無視できなくなり、これ迄より改革が否応なく促されることとなる。ゲーツも、グアルベルトゥスによって教会改革が新たな段階に入った、と評価している。¹⁸ また、自分たちの信仰をどちらかと言えば教会・修道院に任せていたのが、民衆が主体的に信仰生活を送るように変わる。前稿で考察した異端運動も平信徒の主体的な運動ではあったが、これはごく一部の信徒によって行われた宗教運動であった。しかしこれ以降は遙かに広範囲にわたる民衆が担う運動となるのである。

5. 結語

上述のイタリアに発した隠修士運動はフランスにも及び、特に11世紀末の20年間で、前述のシトー修道会の創立者モレームのロベールや、1084年にグルノーブル郊外にラ・グランド・シャルトルーズ修道院（La Grande Chartreuse）を創立し、かつての教え子だった教皇ウルバーヌス2世（Urbanus II、1042頃-99、在位1088-99）によってローマに招聘された後、カラブリアに隠修道院を創設したケルンのブルーノ（Bruno von Köln、1030頃-1101）¹⁹を初めとし、多くの重要な隠修士が輩出している。

隠修士達が手本にしたのは「使徒的生活（*vita apostolica*）」であり、「原始キリスト教教団（*ecclesiae primitivae forma*）」であった。隠修士達は、財布も袋も履き物も持たずに（ルカ 10、4）布教した使徒達の清貧に倣ったが、

¹⁸ Vgl. Goetz, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122, S. 56

¹⁹ カルトゥジオ会士のブルーノ（Bruno der Kartäuser）、ランスのブルーノ（Bruno von Reims）とも呼ばれている。

また、聖職売買にも強く反対した。聖職売買はラテン語では *simonia* と言うが、これは人々の上に手を置いただけで聖霊を与えられる使徒の力を、金銭で買おうとしてペテロに叱責されたサマリアの魔術師シモン (*Simon Magus*) (使 8、9-24) の名に由来する。使徒の生き方に倣うべき聖職者がペテロに叱責されたシモンと同じことを行うとは当然許しがたい行為であった。

また、グアルベルトゥスは使徒達のように市中に出て民衆に説教を行ったが、11世紀末以降、より私的な方法でイエス・キリストに倣うこと (*die Nachfolge Jesu*) を呼びかける巡回説教師達が現れ²⁰、現在知られている12世紀初頭の巡回説教師の殆どが少なくとも一時は隠修士として厳しい禁欲生活を送っている²¹。

こうした隠修士運動に於いて注目すべき点は、隠修士達が旧来の修道院の外で活動した点である。つまり、従来の枠組みを破壊した点にある。何千人という小作農と農奴の働きで食べ、彼らの司牧には殆ど無頓着なクリュニーに代表されるような修道院の生活に反発した隠修士達が修道院外で隠修生活を送ったというのみならず、それまでは修道院に受け入れられなかった、従って、修道生活を送ることのできなかった全ての人々に隠修生活を可能にしたという点は正に画期的であった。

修道院は伝統的に貧しい者達に施しをする自分たちの義務を認識してはいたものの、彼らが神の恵みを祈ったのは何といても、神の満足を得る財を有している富める者達のためであったが、それに対し、正にこの時代に貧者に対する態度が大きく変化した。²² 隠修士の運動は惜しまず施しをするというのみならず、貧者との同一化を強く主張したものであるが、これが社会全体の価値観を変えつつあったと考えることもできよう。アルノ・ボルストは11世紀の農村と12世紀の都市を比較した中で、両者の共通項として財産の多寡によって社会的地位が決まる点を挙げつつ、都市に於いては貧しい者達は農村と異なり、疎らにではなく集団として現れ、狭い都市の中では資産家と極貧の者が路

20 Vgl. Goetz, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. S. 60f.

21 Vgl. Grundmann, Herbert: Religiöse Bewegungen im Mittelalter. S. 492

22 Vgl. Morris, Colin: The Papal Monarchy. S. 73

地で顔を合わせ、また生活条件が多様で容易に変化する環境にあるため、資産家も今日は裕福で尊敬されていても、明日は零落して軽蔑されるかもしれないという将来に対する不安を抱えながら生きていたと述べている。²³ またグレーバは新約聖書に記されている、贅沢に遊び暮らしていた資産家と病氣と貧困に苦しんでいたラザロの寓話（ルカ 16、19-31）が都市に於いては生の現実であり、都市住民は零落の危険性を常に感じていたと述べている。²⁴ また、ローマの裕福な貴族の家に生まれながらも、結婚式の当日に将来得られる筈の全ての財産も放棄して出奔し、17年間清貧と禁欲の生活を送り、その後、両親の家に戻るものの身を明かすことなく、両親、妻、召使い達にも悟られずに蔑まれながら、17年に渡って死ぬまで父の家の階段下で物乞いとして生きた聖アレクシウス（Alexius）の伝説が、11世紀及び12世紀に清貧の理想として急速に広まった。²⁵ このように貧困が他人事ではなく身近な問題としてあった状況では、自ら貧者となった隠修士が崇敬の対象となり、社会に広く受け入れられたことは必然であり、それと同時に彼らの存在が貧者に対する同情や共感を促した可能性は十分考えられることである。

以上のように教会外及び修道院外に於ける隠修士の働きは、他の要素とも相まって、中世の民衆の宗教意識に強く働きかけたが、この民衆による宗教運動は更に拡大発展し、従来の教会の枠組みを超えた一大潮流を形成するに至る。この流れは時として教会の統制を大きく外れ、教会もその対応に苦慮する事態をも招くようになる。その中で異端と見なされる活動も発生する。そしておよそ100年後にマクデブルクのメヒティルト（Mechthild von Magdeburg, 1207/10-82/94）もこの大きな流れの中に生まれ、この中で活躍することとな

23 Borst, Arno: Lebensformen im Mittelalter. Neuausgabe. 5. Aufl. Berlin, 2010. S. 100-113.

24 Gleba, Gudrun: Klosterleben im Mittelalter. 158f.

25 Vgl. Morris, Colin: The Papal Monarchy. S. 73. Mohr, Walter: Alexius. In: Theologische Realenzyklopädie. 2. S. 264ff. Binding, Günther: Alexios v. Edessa. In: Lexikon des Mittelalters. 1. Sp. 384. Remy, Paul (mit L. Guädinger): Alexiuslied. In: Lexikon des Mittelalters. 1. Sp. 388. Goetz, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. S. 58. この伝説に関して現在に伝わっている最古の記録は6世紀か5世紀のシリアのもので、その簡潔な文体で書かれた内容は可成り信頼性が高く、この出来事は412年から435年の間に起こったと考えられる。その後コンスタンティノープルに於いて早くも6世紀中に、遅くとも9世紀前には加筆拡張されてビザンチン版が出来上がった。そして1040年頃に古フランス語の歌が作られ、更に英語やドイツ語に翻訳されてヨーロッパ各地に広まった。歌の作者は不詳である。

る。中世の宗教運動に於いて、隠修士達の運動は大きな転換点ともなり、力強い推進力ともなったのである。

* 本研究は JSPS 科研費 23520393 の助成を受けたものである。

文献表

一次文献

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Nach der Einsiedler Handschrift in kritischem Vergleich mit der gesamten Überlieferung. Hrsg. von Hans Neumann. München / Zürich, 1990.

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Hrsg. von Gisela Vollmann-Profe. Frankfurt/M, 2003.

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Zweite, neubearbeitete Übersetzung mit Einführung und Kommentar von Margot Schmidt. Stuttgart-Bad Cannstatt, 1995.

マクデブルクのメヒティルト（上田兼義訳）：神性の流れる光 キリスト教神秘主義著作集 第4巻Ⅰ 東京 1996。

マクデブルクのメヒティルト（香田芳樹訳）：神性の流れる光 ドイツ神秘主義叢書1 東京 1999年。

共同訳聖書実行委員会：聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき 東京 1987/1988。

二次文献

Krause, Gerhard / Müller, Gerhard (Hrsg.): Theologische Realenzyklopädie. Studienausgabe. 1-36. Berlin, New York, 1993-2004.

Avella-Wildhalm, Gloria / Lutz, Liselotte / Mattejiet, Roswitha / Mattejiet, Ulrich (Hrsg.): Lexikon des Mittelalters. Taschenbuchausgabe. 1-9. München, 2003

大貫隆／名取四郎／宮本久雄／百瀬文晃編：キリスト教辞典 東京 2002。

川口洋：キリスト教用語独和小辞典 東京 1996。

Ruh, Kurt: Geschichte der abendländischen Mystik. 1 (2., Aufl.) -4. München, 1993-1999 (Bd.2-3), 2001 (Bd.1.).

McGinn, Bernard: The presence of God: a history of Western Christian mysticism. 1-3. New York, 1991-1998.

Langer, Otto: Christliche Mystik im Mittelalter. Darmstadt, 2004.

Grundmann, Herbert: Religiöse Bewegungen im Mittelalter. 4., unveränderte Auflage. Reprografischer Nachdruck der 1. Auflage, Berlin 1935 (= Historische Studien, Heft 267) Mit einem Vorwort zum Neudruck 1960 und dem vom Verfasser auf dem Zehnten Internationalen Kongreß der Geschichtswissenschaften, Rom 1955, erstatteten und ergänzten Forschungsbericht „Neue Beiträge zur Geschichte der religiösen Bewegungen im Mittelalter“. Darmstadt, 1977.

Grundmann, Herbert: Ketzergeschichte des Mittelalters. 3., durchgesehene Aufl. In: Die Kirche in ihrer Geschichte. Ein Handbuch herausgegeben von Kurt Dietrich Schmidt und Ernst Wolf Band 2, Lieferung G (1. Teil) Göttingen, 1978.

Goez, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. 2., aktualisierte Auflage. Bearbeitet von Elke Goez. Stuttgart, 2008.

Schieffer, Rudolf: Papst Gregor VII. Kirchenreform und Investiturstreit. München, 2010.

Gleba, Gudrun: Klosterleben im Mittelalter. Darmstadt, 2004.

Morris, Colin: The Papal Monarchy. The western church from 1050 to 1250. Oxford, 1989, reprinted 2001.

Buttinger, Sabine: Hinter Klostermauern. Darmstadt, 2007.

Lambert, Malcolm: Medieval Heresy : popular movements from the Gregorian

- reform to the Reformation. 3rd ed. Malden, Oxford, Carlton, 2002.
- Kee, Howard Clark : Was wissen wir Jesus? Übersetzt von Ulrike Jung-Grell.
Durchgesehene Ausg. Stuttgart, 1999.
- Padberg, Lutz E. von: Die Christianisierung Europas im Mittelalter. -
Stuttgart, 1998.
- Reichstein, Frank-Michael: Das Beginenwesen in Deutschland : Studien und
Katalog. Berlin, 2001.
- Simons, Walter: Cities of ladies: Beguine communities in the medieval low
countries, 1200–1565. Philadelphia, 2001.
- Föbel, Amalie / Hettinger, Anette: Klosterfrauen, Beginen, Ketzerinnen.
Religiöse Lebensformen von Frauen im Mittelalter. Idstein, 2000.
- Ennen, Edith: Frauen im Mittelalter. 6. Aufl. München, 1999.
- Borst, Arno: Lebensformen im Mittelalter. Neuausgabe. 5. Aufl. Berlin, 2010.
- Engel, Evamaria: Die deutsche Stadt im Mittelalter. Düsseldorf, 2005.
- Schubert, Ernst: Alltag im Mittelalter. Natürliches Lebensumfeld und
menschliches Miteinander. Darmstadt, 2002.
- ダンテ、アリギエリ (原基晶 訳) : 神曲 天国編 東京 2014 年。

The social contexts of *The Flowing Light of the Godhead*
by Mechthild of Magdeburg (2)

—Hermits in the Middle Ages—

Karino, Toshihiro

In the religious movement in the Middle Ages hermits played a very important role. They lived and practiced austerities outside the monastery, because they found the monks who resided there too irresponsible.

The hermits followed the apostolic life as set down in the Acts of Apostles. The majority of them were not solitaries, but formed communities with companions or with a group of disciples. Some of them not only lived in seclusion but also preached in the streets. Many ordinary people who lived with ceaseless fear of impoverishment revered the hermit living in self-imposed poverty.

Many of the hermits fought the corrupt practice of simony, and some urged the people to action to remove simoniacal clergymen from office. Furthermore, the people were stimulated by the hermits into supporting the religious movement.

The hermits who were active outside the Church and monasteries considerably broadened the religious movement in the Middle Ages, a movement in which, a hundred years or so later, Mechthild of Magdeburg would play a key role.